

出会いはタカラモノ

子どもから教えられたことばかり

第7回 「行かない」選択は「行く」選択と同じ価値



佐藤比呂二

さとう ひろじ／東京都生まれ。
特別支援学校教員。編著書に『ホ
ントのねがいをつかむ—自閉症
児を育む実践』(全障研出版部)
など。

不登校になり、今を失う

今回はうちの子の話にお付き合いください。わが家には子どもが5人いますが、3人（1番目、4番目、5番目）が小

学1年の頃から中学にかけて不登校でした。

「出番を待ちました。その間ずっと、「こうやつて踊るんだよ」と放課後に教えてもらつたダンスを何度も繰り返したのは、本人なりの精一杯の心の準備でしょう。いよいよ時間になり、娘はカミさんと一緒に入場門に向かい、私は校庭でカメラを手に待ち構えていたのですが…。入場してくる子どもたちのなかに娘の姿はありませんでした。あんなに一生懸命練習して、一人でリハーサルを繰り返して、結局出られぬまま

不登校を克服したとき、「ゆっくりしたい」という子は少くないといいます。「家でずっとゆっくりしていただろう」というのは大きな誤解です。たとえ体は動かしていないくとも心はすり減らし続いているのです。

われたら「自分はがんばっていないのか」と自己を責め、「これ以上とてもがんばれない」と絶望してしまった子たちでした。そんな子たちには、目には見えにくいがんばりに共感し、「がんばれ」ではなく「がんばつてね」と声をかけてくれる人が必要なのです。

とはいえ、表面上の言葉の問題ではありません。ときには、自分のつらさをわかってくれていると思える人からの「がんばれ」だからこそ力をもらえることもあります。どう寄り添えればいいのか、答えは子どものなかにしかありません。

ありのままの自分を認めてくれる人

自分自身の存在を消し去りたいと思い続ける日々は、出口のない暗闇のなかにいるようなものでしよう。

光を得ました。

「誘われてもやりたがらないのは意欲がないわけではない。完璧にやらねばという思いの強さゆえ絶対できる自信がないと一步踏み出せないから。適当にやればいいやと思える方がはるかに楽なのに」

「行けない」から「行かない」へ

ちなみに、その先生は小学生のときのなつみを知つてお
り、「なつちゃんに言われて反省したわ～。成長したね」と
電話をくれました。

娘は近くの公立中学に入学すると「わたし学校に行かないことにする」と言えるようになりました。その上で、「今日は5分だけ行く。みんなと会わないよう入口を変える。勉強はしたいからプリントは引き出しにいれてもらう」等、自

戻ってきたときの固く閉ざされた表情は忘れられません。どんなに自分自身に落胆してしまったことか。

不登校が続く奴は「学校に行きた・行かない」で詰屈はない」と決めていましたが、本人はとてもそうは思えないのでしょう。この時期は、日中に車で出かけると、どんなに暑くても毛布で全身を覆い隠していました。学校のある時間は誰にも姿を見られたくない、そんな気持ちだったのではないと思います。自分はここにいてはいけない存在：不登校になつたことで自分の居場所、すなわち“今”を失います。

「がんばれ」ではなく「がんばつてるね」

「がんばれ」ではなく「がんばりたるね」

「…

ててしまう。その連続に疲れ果て、応じられないときはフリー
ズしてしまう」

「…

このようにカウンセラーの先生は娘の内面を「理解」し、
ありのまま「承認」してくれました。

不登校の自分をありのまま認めてく

の代弁者との出会いは、自分は自分で大丈夫という安心感につながり、失われていた「今」を少しずつ取り戻し始めます。成長した娘が高校生のとき、不登校になっていた妹（小4）に付き添って小学校に連れて行つたことがあります。4時間目の授業だけという約束でしたが、思いのほか授業にのっていた妹の姿に先生が「給食を食べていかない?」と声をかけたそうです。先生の意図を察しフリーズした妹。そのとき、姉のなつみが「4時間目だけという約束で来たんですけども誘わないでください。このまま帰ります」と連れ帰つきました。妹の気持ちをわが身に重ね、代弁してくれたのでしよう。わが家では「よく言った」と大絶賛です。

り、「なっちゃんに言われて反省したわ）。成長したね」と電話をくれました。